

## 〈注〉

- 1) 介護観とは、介護をする上で自分が大切にしたいと思うこと(水谷 2022:15)。
- 2) 介護技術評価とは、食事、排泄、更衣、入浴、体位変換、移乗、健康チェック、緊急対応、関係構築、協働の10因子を指す(原野 2015)。

## ◎ 引用文献

総務省統計局, 2022,「統計からみた我が国の高齢者—『敬老の日』にちなんで—」, 総務省.

総務省統計局ホームページ(2024年2月7日取得, <https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1321.html>).

厚生労働省, 2024,「我が国の人口について」, 厚生労働省ホームページ(2024年7月1日取得, [https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_21481.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_21481.html)).

厚生労働省, 2021,「第8期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数について」, 厚生労働省ホームページ(2024年2月7日取得, <https://www.mhlw.go.jp/content/12004000/000804129.pdf>).

日本看護協会, 2021,「看護チームにおける看護師・准看護師及び看護補助者の在り方に関するガイドライン及び活用ガイド2021年度改訂版」, (2023年8月6日取得, [https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/guideline/way\\_of\\_nursing\\_service.pdf](https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/guideline/way_of_nursing_service.pdf)).

全国社会福祉協議会, 2021,「改訂2版福祉職員キャリアパス対応生涯研修テキスト チームリーダー編」, 日経印刷株

式会社.

白石旬子・大塚武則・影山優子ほか, 2010,「介護老人福祉施設の介護職員の『介護観』に関する研究-経験年数, 教育・資格による相違-」『介護福祉学』17(2): 164-175.

水谷なおみ・藤原秀子・丹羽啓子ほか, 2022,「介護職員における介護観の特徴-質的調査の結果から-」『日本福祉大学健康科学論集』25: 14-20.

水谷なおみ・藤原秀子・丹羽啓子ほか, 2020,「介護観の形成に影響を与える因子に関する研究-介護福祉士養成課程で学ぶ大学生を対象に-」『日本福祉大学健康科学論集』23: 1-9.

原野かおり・出井涼介・桐野匡史ほか, 2015,「介護技術評価尺度の開発」『岡山県立大学保健福祉学部紀要』22: 101-107.

鈴木由真, 2018,「介護福祉士の職業教育訓練による職務認識の差異—『尊厳と自立』概念に着目して」『福祉社会学研究』15: 265-288.

研究  
ノート

# 介護現場における介護過程教育の現状と課題 — 情報分析プロセスを活用した研修会からの考察 —

戸館 康秀 一般社団法人 仁生会 にしぼり

キーワード ▶ 介護過程、情報分析、介護福祉士の専門性、仮説思考

## I | 研究背景と目的

介護福祉士は介護福祉分野唯一の国家資格であり、社会福祉士及び介護福祉士法において、「介護福祉士の名称を用いて専門的知識及び技術をも

つて、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき心身の状態に応じた介護(略痰吸引その他その者が日常生活を営むのに必要な行為であって、医師の指示の下に行われるもの(厚生労働省令で定めるもの

限る。以下「喀痰吸引等」という。)を含む。)を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行うこと(以下「介護等」という。)を業とする者をいう。」と示されている。社会福祉士及び介護福祉士法が制定された1987年の定義では、「入浴、排せつ、食事その他の介護を行い」と介護行為が主な業として示されていたが、2007年に「心身の状況に応じた介護」へ改正。さらに2011年に、心身の状況に応じた介護に医療的ケアが追加され現在の定義となった。多様化、複雑化、高度化する介護ニーズに対応すべく、より専門性の高い介護福祉士が求められている。

介護福祉士の専門性の一つに、利用者の自立に向けた「介護過程の展開」があげられる。公益社団法人日本介護福祉士会が整理した介護福祉士の専門性にある「介護過程の展開による根拠に基づいた介護実践」や、社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会の「求められる介護福祉士像」(厚生労働省:2017)にある「専門職として自律的に介護過程の展開ができる」が示すように、介護福祉士には介護過程の実践力が求められている。介護過程を学習する学生を対象とした筆者の先行研究では、「仮説思考」を取り入れ、「利用者の現在

の状況」+「現状が続くことにより想定されるリスク」+「より良い生活のためにできる可能性」のカテゴリーを統合させ、生活課題と根拠を明確化させる情報分析プロセスが介護過程の理解と思考力の向上に有効であったが、生活支援の現場で働く介護福祉士や実務者研修修了者、介護職員初任者研修修了者等(以下、介護福祉職)を対象としても活用できるかが今後の課題として残った(戸館 2024:74-75)。この情報分析プロセスは、習得している知識、技術、倫理観や情報の質により根拠の妥当性に差が生じることが予測されるが、体験に基づく利用者情報からイメージを膨らませ、仮説を立てていくことから、既に介護現場で利用者との関わりが十分に図れている介護福祉職を対象としても有効性があるか検証することを本研究の目的とする(図1)。

しかし、介護福祉士養成カリキュラムで介護過程は、2009年に150時間の必修科目として位置づけられている点や、資格取得ルートによって介護過程の認識に個人差があることが想定される。研究を進める過程として、介護過程の学習状況も調査し、介護福祉士の専門性について探求していくこととする。

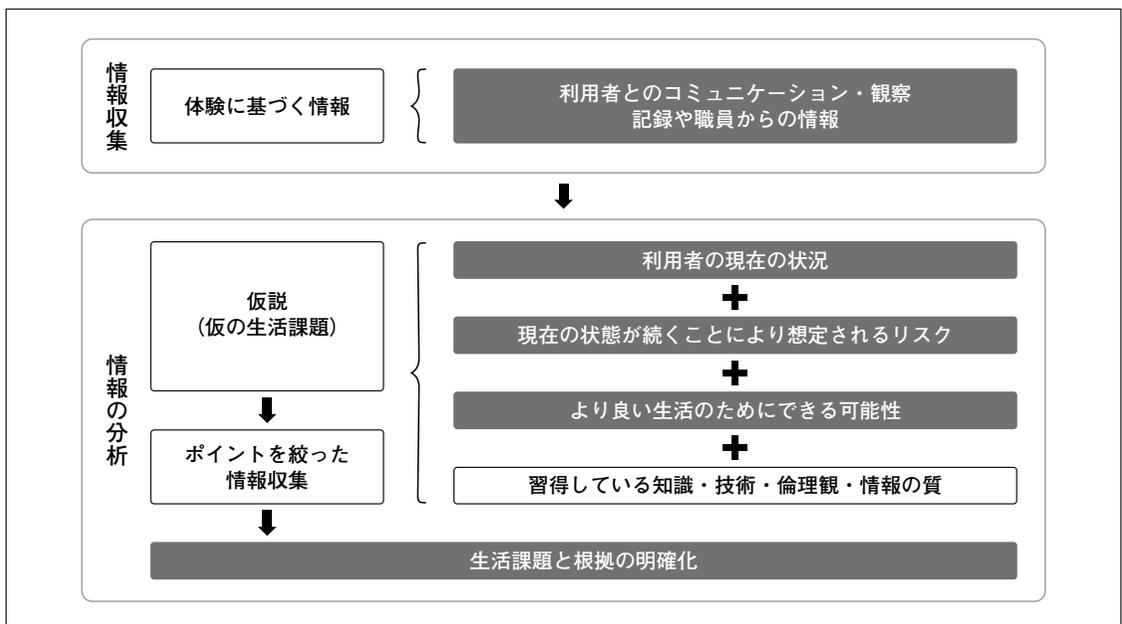


図1 仮説思考を用いた生活課題と根拠の明確化についてのプロセス

## II | 研究方法

### 1. 研究対象、及び研究期間

2023年10月開催の北海道南地区の介護保険施設主催研修会に参加した15施設の職員58名の内、介護福祉職36名を対象とした。

### 2. 研究内容

#### ①研修会の内容

研修会のテーマを「根拠に基づいたケアの実践」とし、利用者へ根拠あるケアが実践できているか、家族や第三者に根拠あるケアを説明できるかを主軸とした。なお、「介護の実践」ではなく「ケアの実践」という言葉を使用した意図は、研修会の参加対象が多職種であったためである。研修会の構成は「なぜ根拠あるケアが必要なのか(感染対策が利用者主体のケアを阻害していないか)」、「自己開示の必要性(自己理解と他者理解の演習)」、「問題解決の思考法(介護過程、P D C Aサイクル、演繹法、帰納法の講義と演習)」、「自職場の分析(事例を用いた情報分析プロセスの活用)」、「まとめ」とした。「情報分析プロセス」の有効性を研究する「自職場の分析」の詳細として、実践の場をイメージしやすく、且つ自職場でも起こりえる問題を、川添らの研究(川添ほか：2016)を参考に「尿意が頻回な利用者の事例1件」、「利用者に対する言葉遣いの事例2件」の3つの事例を設定。1グループ約5名の合計13グループでグループディスカッションを行い、自職場で抱える問題と類似する事例を選択。問題を解決するための仮説を立てる過程として「利用者の現在の状況(事例と類似する自職場の状況)」+「現在の状況が続くことにより想定されるリスク(利用者、家族、組織の状態)」+「より良い生活のためにできる可能性(課題解決に向けたポジティブな思考)」で設定したフレームワーク(枠組み)を活用し、課題解決に向けた根拠あるケアを導き出せるかという内容とした。

#### ②データ収集方法

研修会終了後にアンケート用紙を用いた自記式質問紙調査を実施。調査は参加者全員としたが、

介護福祉職を対象とした調査内容として、「介護福祉職としての通算経験年数」、「保有している資格(介護福祉士、実務者研修、介護職員初任者研修、その他自由記述の4択)」、「介護福祉士の方は資格取得ルート(養成施設(福祉系高校含む)、実務経験+実務者研修、実務経験の3択)」、「介護過程を含む思考法について学習した経験(ある、ないの2択)」、「思考法を学習した方は、現場で活かされているか(いる、いないの2択)」、「思考法が活かされていると回答した方は、どのような場面で活かされているか(自由記述)」、「思考法が活かされていないと回答した方は、その理由(自由記述)」、「研修会の学習効果(よかった、わかったの2択)」の8つの質問形式とした。

### 3. 分析方法

アンケート調査で得られた情報をクロス集計し、「保有資格により介護過程の理解度に差はあるのか」、「介護過程が現場で活用できているのか」、「研修会の学習効果と情報分析プロセスの有効性」を分析した。なお、情報分析プロセスの有効性は、研修会の学習効果の集計結果と、設定したフレームワーク(枠組み)の活用状況(仮説を立てることができたか、根拠あるケアを導き出せているか)から分析した。

介護過程の学習カリキュラムは、社会福祉士介護福祉士養成施設指定規則にて「養成施設150時間(福祉系高校ルート140時間)」、「実務者研修90時間(介護過程Ⅰ20時間、介護過程Ⅱ25時間、介護過程Ⅲ45時間)」(厚生労働省：2016)と定められ、介護職員初任者研修においては「10～12時間程度(ころとからだのしくみと生活支援技術75時間のうち、生活支援技術演習に含まれる介護過程の基礎的理解)」(厚生労働省：2018)となっており、無資格者以外であれば一定の学習経験があることが想定される。

### 4. 倫理的配慮

本研究の目的、調査への参加協力は自由意志に基づくことを研修会内で説明、及びアンケート調査用紙にも研究の趣旨を明記し同意を得たものと

した。回答は無記名とし、個人が特定されないよう収集したデータは筆者が一元的に管理した。また、本研究は日本介護福祉士会の「臨床研究における研究倫理チェックリスト」に基づき遵守して実施した。

### Ⅲ | 結果

対象の介護福祉職36名の回答結果から、質問に対して未記入の項目があった2件を除いた34名(有効回答率94%)の回答を得ることができた(表1)。

#### 1. 保有資格と経験年数

保有資格は介護福祉士29名(85.3%)、実務者研修修了1名(2.9%)、介護職員初任者研修3名(8.8%)、その他(無資格)1名(2.9%)であった。介護福祉士で実務者研修を修了している等、複数の資格を保有している場合は、資格取得ルートで実態が把握できたため、ここでは上位資格のみを反映させた。

介護福祉職としての通算経験年数は、6～10年が最も多く、11名(32.4%)であった。

#### 2. 介護福祉士資格取得ルートと介護過程の学習経験

介護福祉士保有者29名のみを対象とした資格取得ルートの結果は、養成施設(福祉系高校含む)14名(48.3%)、実務経験+実務者研修9名(31%)、実務経験6名(20.7%)であった。

介護過程を含む思考法について学習した経験(介護過程の学習経験)では、あると回答したのが15名(44.1%)で、すべて介護福祉士であった。ないと回答したのが19名(55.9%)で、そのうち14名の介護福祉士は学習経験がないという結果であった。介護福祉士保有者で介護過程の学習経験がないと回答した14名を、資格取得ルートと通算経験年数で集計した結果、養成施設(福祉系高校含む)3名(21.4%)、実務経験+実務者研修5名(35.7%)、実務経験6名(42.9%)であった。養成施設ルートでは16～20年1名、26年以上2

表1 アンケート調査結果

項目	質問内容	介護福祉士	実務者研修修了	介護職員初任者研修	その他(無資格)	合計	構成比
経験年数 n = 34	0～5年	3	0	2	1	6	17.6%
	6～10年	10	0	1	0	11	32.4%
	11～15年	4	1	0	0	5	14.7%
	16～20年	6	0	0	0	6	17.6%
	21～25年	4	0	0	0	4	11.8%
	26年～	2	0	0	0	2	5.9%
資格取得ルート (介護福祉士保有者のみ) n = 29	養成施設(福祉系高校含む)	14				14	48.3%
	実務経験+実務者研修	9				9	31%
	実務経験	6				6	20.7%
介護過程の学習経験 n = 34	ある	15	0	0	0	15	44.1%
	ない	14	1	3	1	19	55.9%
介護過程の現場での活用 (学習経験あるのみ) n = 15	活かされている	11	0	0	0	11	73.3%
	活かされていない	4	0	0	0	4	26.7%

表2 介護過程の学習経験がないと回答した介護福祉士の資格取得ルートと経験年数の集計結果

資格取得ルート	経験年数						合計	構成比
	0～5年	6～10年	11～15年	16～20年	21～25年	26年～		
養成施設(福祉系高校含む)	0	0	0	1	0	2	3	21.4%
実務経験+実務者研修	1	2	0	1	1	0	5	35.7%
実務経験	0	0	2	3	1	0	6	42.9%

名と、長い経験年数がある者の学習経験がない結果であり、介護概論の中に介護過程の教育内容が含まれていた2009年以前の学習経験者であった。実務経験+実務者研修では経験年数別に大差はなく、学習経験がないと回答したのが最も多かった実務経験ルートで資格を取得した者は、11～25年の経験年数を有する結果であった(表2)。

### 3. 介護過程の現場での活用実態

介護過程の学習経験があると回答した15名の、介護過程の学習が現場で活かされているかの調査は、活かされている11名(73.3%)、活かされていない4名(26.7%)であった。どのような場面で活かされているかの自由記述では10件の回答があり、「利用者との日常生活のすべてにおいて使用」等の生活支援の場面や、「カンファレンスでリスク部分を話し合い、対策を決めて実行しています」といった会議での場面、「ケアプランで評価を行っている」等のケアプランとの連動、「職員それぞれの主観ではなく、根拠を求めるようになった」等といった思考法として活用している内容であった。活かされていない理由の自由記述では3件の回答があり、「業務に追われる」、「時間がとれない」等といった、業務多忙や周囲を含めた理解力が不足している現状がうかがえる内容であった(表3)。

表3 介護過程の学習が現場で活かされているかの集計結果

質問項目	カテゴリー	具体的な内容
活かされている	生活支援の場面	時と場合です、毎回ではありません、自分がやっている対応がこの講義でやった内容とリンクしていることもありました 利用者の対応時にストレスを感じた場面等 利用者との日常生活の全てにおいて使用(不穏等の対応の仕方等)
	ケアプランとの連動	ケアプラン等の作成時や利用者との関わり等 ケアプランで評価を行っている ケアプラン作成時に使用している
	会議の場面	利用者から朝の洗顔を一人でやりたいとの訴えに対し、カンファレンスでリスク部分を話し合い対策を決めて実行しています 利用者の症状、記録類で活用しています、カンファレンスや会議等
	思考法	職員それぞれの主観ではなく、根拠を求めるようになった(アセスメントの段階) PDCAサイクルの活用等
活かされていない	業務多忙	業務に追われる そのような場を設けるためにスタッフを集めることができない、時間が取れない
	理解不足	前と変わらないから等という理由で検討段階にいくまでが遅いと感じることがあったためです

## 4. 研修会の学習効果と情報分析プロセスの有効性

研修会の学習効果は、よかった34名(100%)、よくなかった0名(0%)であった。研究対象ではないが、研修参加の他職種(看護師、理学療法士等のリハビリテーション職、管理栄養士、ケアマネジャー等の相談職)の学習効果は、よかった22名(100%)、よくなかった0名(0%)であった。

情報分析プロセスのフレームワーク(枠組み)の活用状況では、「利用者の現在の状況」にて自職場の状況の考察を、「現在の状況が続くことにより想定されるリスク」にて心身機能の低下や組織の評価が低迷するリスクの考察を、「より良い生活のためにできる可能性」にてできる取り組みの考察を、全てのグループにおいて根拠あるケアを導き出すためのディスカッションが成されており項目に沿って記述することができていた。

## IV | 考察

### 1. 保有資格と介護過程の理解度の関連性

公益社団法人日本介護福祉士会(2023)の調査報告によると、全国の日本介護福祉士会会員の介護福祉士取得ルート割合は「養成施設38%(福祉系高校を含む)」、「実務者研修12%」、「実務経験

49%〕、「その他1%』となっている。本研究対象の取得ルート割合と比較すると、「養成施設+10.3%〕、「実務者研修+19%〕、「実務経験-28.3%』となり、全国平均より養成施設ルートでの資格取得割合が高く、実務経験ルート割合が低い傾向であった。介護過程を学習し、現場で活用できていると回答した割合が73.3%と高い値であった結果は、介護福祉士養成施設で介護過程を学習していた対象が多かったためであると考ええる。

特筆すべきは、介護過程の学習経験がないと回答した結果である。介護職員初任者研修修了者は合計3名で、全員が介護過程の学習経験がないと回答している。これは、「こころとからだのしくみと生活支援技術75時間」のなかの「介護過程の基礎的理解」という短時間での学習が要因であると推測される。しかし、実務者研修に関しては、「介護福祉士養成課程のうち、実務経験のみでは修得できない知識・技術を中心に構成」と、研修の内容が示されている(厚生労働省:2014)。実際、実務者研修のカリキュラムで介護過程は90時間と設定されており、学習の機会は確保されているが、調査結果をみると実務者研修修了者1名を加えた実務経験+実務者研修で介護福祉士を取得した合計10名のうち、6名が介護過程を学習していないと回答している。対象者の学習意欲、学習環境、理解度等は、今回の調査内容だけでは分析困難であるが、学習の機会が担保されているにもかかわらずの回答結果であることは今後の検討課題であるといえる。いずれにしても介護過程は、2009年に介護福祉士養成カリキュラムに独立した科目として位置づけられた点や、2017年の第29回介護福祉士国家試験から実務経験ルートに実務者研修の修了が必要となったことが関係し、現場の介護福祉士の介護過程の学習経験には大きな差が生じていると考察する。

## 2. 介護過程の現場での活用実態

介護過程が現場で活かされている具体的内容では、生活支援や会議の場面等、学習経験が多様な場面で活用されている。これは、介護過程を通じて思考法を学習することが、多様化、複雑化、高

度化する介護ニーズに対応することができる専門的な介護福祉士の育成につながるものと考ええる。しかしながら、株式会社コモン計画研究所(2022)の調査によると、介護過程としての介護計画を作成している施設は約3割であり、ケアマネジャー等により作成が義務付けられているケアプランで対応できているため介護過程実践が意識しづらい、法的に介護計画の作成義務がない、と報告している。今回の調査でも、ケアプランと連動する具体的場面の回答があったが、介護過程とケアマネジメントは連動するが、介護過程=ケアプランではない。ケアプランという基本計画と連動し、各専門職が目標に向かって連携するチームアプローチの一つに介護計画が位置づけられていることを認知している回答であったかは分析できない。介護過程が現場で活かされていない回答にある業務多忙やチーム力の課題では、介護現場における慢性的な人材不足が根底にあると推測するが、介護過程が介護福祉士でもあっても理解度に差が生じていることが課題であると考ええる。

介護労働安定センター(2022)の調査によると、「今の職場で受講した研修」で最も多かったのは「高齢者虐待の防止に関する研修68.2%』であり、次いで「衛生管理(感染症・食中毒予防等)に関する研修65.0%〕、「身体拘束に関する研修61.8%』と、実施が義務付けられている研修が上位を占めている。また、日本介護福祉士会(2023)の調査による「都道府県介護福祉士会主催研修会への参加の有無」では、参加していない割合が全体で77.3%と高値となっており、本研究場所である北海道は参加していない割合81.5%と報告している。義務付けがある研修の参加割合、介護福祉士の専門性を担保する研修への参加割合の状況から考察すると、介護過程を学習する機会は極端に少ない、または皆無に等しいのではないかと考える。

## 3. 介護現場における介護過程の情報分析プロセスの有効性

情報分析プロセスは仮説思考がベースとなっており、佐渡のゴール仮説にあるよう「ゴールイメージの検討を早々に始め、ゴールと現状のギャップ

を明らかにしながら仮説検証型でゴールの質を磨き上げていく方法」を用いており、『問いのずれ』が生じないよう「ゴール仮説を議論するのも、この『問い＝真に答えるべき問題』が全員で一致していることを確認した後」(佐渡 2018: 46-47, 64-71) であると、ディスカッションの重要性について述べている。岡村も、「P D C Aを回していくためには、ゴールが明確になっていることが大前提です。」(岡村 2017: 82) と、ゴールを設定した上で P D C Aを回していく「G - P D C A」を述べている。分析結果から、情報分析プロセスは介護福祉職だけではなく、各専門職にも理解されやすいものであったと考えるが、自分の考えが正しいのか、解決すべき課題が適正なのかをグループというチームで情報交換しディスカッションしたことで、研修効果が増加し理解の向上につながったと考察する。

仮説を立てるには思考力の向上が重要であり、北村(2021)や笠間(2022)は、思考実験を用いて観察力や発想力の向上、自分の意見を見つけることの重要性を示している。また、佐宗は「人は妄想を明確にすることで、初めて『情報ギャップ』を感じることができる」と妄想と現実との緊張関係が創造性には不可欠であると述べており(佐宗 2019: 94)、森は、介護過程の取り組みについて、よくなっていくイメージを描き、イメージに根拠があるのかを検証していくことの重要性を述べている(森 2015: 46-47)。情報分析プロセスは、利用者の生活を阻害する「リスク」を踏まえたうえで、重要となる「できる可能性」を考察するフレームワーク(枠組み)として設定しているため、結果として課題や根拠を明確化する思考が促進されやすかったと考える。

#### 4. 介護過程を学習する意義

介護過程を学習した経験がある場合、生活支援の場面だけではなく、会議やメンタルコントロール等、多様な場面で思考法が役立っていることは、口村(2022)が介護福祉士の卓越した実践の特徴としても述べている。また、牧野らは「①観察(みてきづく)→②仮説(ことばにする)→③検証(し

らべてよくかんがえてたしかめる)→知識(わかる)」(牧野ほか 2021: 19-32)の仮説を用いた科学的思考をループさせることで信頼性が増してくることを述べており、根拠を探求することで蓄積された知識は利用者だけではなく、家族や職員間等の納得や安心につながり、結果として介護福祉士の専門性の向上につながるものとする。

しかしながら、介護過程を学習する機会は意図的、組織的に設定しなければ得られるものではなく、慢性的な人材不足や業務多忙等の影響から「できる可能性」を考えるポジティブな思考が阻害され、ネガティブな思考が優位に立つことが懸念される。樺沢は、「行動や努力をして、仮に1日10個の出来事のうち9個が『楽しい』『幸せ』、1個が『苦しい』という比率になったとしても、『苦しい』1個にしか注目できない人は、永久に『幸せ』を感じることもできないのです」(樺沢 2021: 132-141) と、幸せ収集能力について述べており、介護過程を通じてポジティブな思考を継続的に培っていくことが重要である。

介護福祉士の専門性については、公益社団法人日本介護福祉士会(2023)が、介護福祉士の歴史の変遷から多職種連携における介護福祉士への期待等を示しているが、介護過程のプロセスが幅広く理解、浸透されることで専門性は格段に向上されるはずであり、本研究の情報分析プロセスがその一助となればと考える。

## V | 結論と課題

本研究を通じて、根拠を明確に示すことに難しさを感じる養成施設の学生だけではなく、情報分析プロセスは介護現場で働く介護福祉職、さらには各専門職にも一定の有効性があることが示された。しかし、実際の利用者を対象として活用していない点や、情報分析プロセスは介護過程のアセスメント部分であり、次の過程である計画の立案、実施、評価へどのように影響されていくか等、課題が残った。利用者を対象として情報分析プロセスを活用し、有効性に焦点を絞った検証をしていきつつ、介護過程の学習機会を介護現場で担保していきたい。

介護現場には、介護福祉士をはじめとした実務者研修修了者、介護職員初任者研修修了者等の資格保有者、昨今では外国人、アクティブシニア等、実に多様な人材が混在しており、学習経験も多岐にわたる。北海道南地区においては、2024年4月時点で介護福祉士養成施設0、福祉系高校1校のみとなり、介護現場の学習環境の整備がさらに重要となってきたと考える。教育水準を一定に

保つことは容易ではないが、介護過程の学習が基盤となり、思考力を培った介護福祉職が増加していけるよう研究を継続していきたい。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、協力してくださった研修会参加職員の皆様、及び事務局の皆様へ深く感謝申し上げます。

## ◎ 参考文献

岡村拓朗, 2017,『自分を劇的に成長させる!PDCAノート』フォレスト出版:82.

介護福祉士養成講座編集委員会, 2022,『最新 介護福祉士養成講座9 介護過程 第2版』中央法規出版株式会社.

笠間リョウ, 2022,『この1冊で「考える力」が面白いほど鍛えられる!思考実験BEST50』綜合法令出版.

樺沢紫苑, 2021,『精神科医が見つけた3つの幸福 最新科学から最高の人生をつくる方法』飛鳥新社:132-141.

株式会社コモン計画研究所, 2022,「令和3年度社会福祉推進事業 科学的介護情報システム(LIFE)を活用した介護過程実践に関する調査研究事業 報告書」.

戸館康秀, 2024,「介護過程の教授方法についての研究-思考力の向上に有効な授業計画-」『介護福祉士』29:74-75.

公益財団法人 介護労働安定センター, 2023,「令和4年度介護労働実態調査 介護労働者の就業実態と就業意識調査 結果報告書」資料編44.

公益社団法人 日本介護福祉士会, 2023,『介護福祉士の専門性とは何か 私たちの果たすべき役割と責任』中央法規出版株式会社.

公益社団法人 日本介護福祉士会, 2023,「第14回 介護福祉士の就労実態と専門性の意識に関する調査 報告書」(2024年5月20日取得, [https://www.jaccw.or.jp/kenkyu-14\\_syuurouzittaichousa\\_houkokusyo.pdf](https://www.jaccw.or.jp/kenkyu-14_syuurouzittaichousa_houkokusyo.pdf)).

公益社団法人 日本介護福祉士会,「介護福祉士の専門性」(2024年1月8日取得, <https://www.jaccw.or.jp/about/fukushishi/senmon>).

厚生労働省 社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会,2016,「介護福祉士の養成カリキュラム等について」(2024年3月1日取得, [\[Sanjikanshitsu\\\_Shakaihoshoutantou/0000142797.pdf\]\(https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihoukenfukushibu-Kikakuka/siryoul\_6.pdf\)\).

厚生労働省 社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会,2017,「介護人材に求められる機能の明確化とキャリアパスの実現に向けて」\(2024年1月8日取得, <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000179736.html>\).

厚生労働省,2014,「介護福祉士資格の取得方法について」\(2024年5月20日取得, \[https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihoukenfukushibu-Kikakuka/siryoul\\\_6.pdf\]\(https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihoukenfukushibu-Kikakuka/siryoul\_6.pdf\)\).

厚生労働省,2018,「介護員養成研修の取扱細則について」\(2024年3月1日取得, <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000054119.html>\).

口村淳, 2022,「介護福祉士が展開する卓越した実践の特徴-A県の介護福祉士会を対象とした自由記述回答の質的分析を通じて-」『介護福祉士』27.

佐宗邦威, 2019,『直感と論理をつなぐ思考法』ダイヤモンド社:94.

佐渡誠,2018,『「ゴール仮説」から始める問題解決アプローチ』すばる舎:46-47, 64-71.

森繁樹, 2015,『事例で読み解く 介護過程の展開 根拠に基づく「生活支援」を実践するために』中央法規出版株式会社:46-47.

川添誠, 2016,「介護福祉士養成校の学生が実習先で違和感を抱いたエピソードについての研究②-違和感の実態とその影響 M-GTA分析を用いて」『介護福祉士』20・21.

北村良子, 2021,『思考実験が教えるあなたの脳の鍛え方』青春出版社.

牧野悌也, 菅原研, 土原和子, 村上弘志, 2021,『科学的思考のススメ「もしかして」からはじめよう』ミネルヴァ書房:19-32.](https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-</a></p></div><div data-bbox=)